

年頭のごあいさつ

～木材利用における環境・歴史的制約とベストミックス～

林産試験場長 八坂通泰

新年明けましておめでとうございます。

平成31年を迎え、謹んで新春のご挨拶を申し上げます。

昨年の11月20日から22日に東京ビックサイトで開催されたジャパンホーム&ビルディングショー「ふるさと建材・家具見本市」において、林産試験場もCLTやコアドライなど道産材を活用した研究成果を紹介させていただきました。このとき来場者の方から印象的な質問を頂きました。

「なぜ、道産材は建築材での利用が少ないのですか？」

この素朴な疑問に、私はある世界的なベストセラーを思い出しました。そのベストセラーはアメリカの生物学者ジャレド・ダイヤモンドによって1997年（日本語訳2000年）に発行された「銃・病原菌・鉄～1万3000年にわたる人類史の謎～」です。本書では、現在の世界に広がる富とパワーの地域格差を生み出した人類史の謎を、生物学、文化人類学、言語学など最新の科学的知見から解き明かしています。

著者は、その究極要因は人種間の能力的差違にあるのではなく、農作物や家畜に適した野生動植物が分布していた地域での狩猟社会から農耕社会へのより早い移行にあるとしています。これにより一歩リードした地域で、余剰人口を養っていける食料生産が可能になり、文字、鉄器、政治機構などが発明され、さらに銃などの武器や家畜由来の病原菌が、これらを持たない地域への侵略を容易にしました。つまり、環境と歴史の制約が今日の大きな格差をもたらしたのです。

本書の冒頭場面で著者は、この人類史の壮大な謎に取り組むきっかけは、鳥類調査で訪れていたパプアニューギニアで若い政治家から受けた素朴な質問であったと述べています。

「白人は多くのを発明しパプアニューギニアに持ち込んだが、なぜ私たちパプアニューギニア人には自分たちのものがほとんどないのか？」

二つの疑問は、時代も対象も全く異なり、無関係なようで共通点があります。歴史的背景として、北海道では米づくりは行われず弥生文化は伝わりませんでした。縄文文化、擦文文化など独自の文化が発展したことあげられます。直接的には、建築材に適したスギの造林は、気候的制約から北海道の一部に限定されました。また、カラマツは建築材に不向きとされてきましたし、カラマツ・トドマツとも防火処理がスギに比べ困難です。他には、北海道では高度経済成長期に木材価格高騰や防寒対策からブロック住宅が広く普及した点なども関係しているでしょう。つまり北海道の木材利用の現状も、環境・歴史的な制約がある中で捨選択された結果と考えられるのではないのでしょうか？

人類史の壮大な謎と北海道の木材利用をこじつける仮説の真偽はともかくとして、建築材、産業用資材、パルプ、合板、燃料など、現在の木材利用のあり方は、今後も変化しないのでしょうか？森林資源としては、カラマツ人工林での増産は難しいもののトドマツ人工林では増産可能で、両樹種とも高齢化、大径化するとともに、天然林も順次利用可能な状態になると予想されます。道産材の利用も無垢材、エンジニアリングウッド、CNFなどにおける様々な技術開発が今後も期待されます。

これまでも、森林資源や社会経済的状況によって、木材の利用方法は変化してきました。森林資源には、樹種や利用可能量などに制約があり、エネルギーでベストミックスが議論されるように、時代や地域に応じた「木材利用のベストミックス」があるのではないのでしょうか。「木材利用のベストミックス」には、変化する資源や木材需要への対応だけでなく戦略的な姿勢も望まれます。このとき、様々な制約を克服し戦略性を高める技術革新も林産試験場の重要な役割になるでしょう。

平成最後の年頭のご挨拶になります。新しい年号の時代になりましても、林産試験場をご指導、ご鞭撻頂くことをお願い申し上げます。新年のご挨拶とさせていただきます。

